

【寄稿】知事とメディアの相互不信：「奥田日記」 の西日本新聞批判について

大西，直人
西日本新聞：元担当記者

<https://doi.org/10.15017/2344797>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 3, pp.327-330, 2019-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)
バージョン：
権利関係：

【寄稿】

知事とメディアの相互不信

——「奥田日記」の西日本新聞批判について

西日本新聞元担当記者 大西直人

今回の会報で紹介した1990～91年の「奥田日記」には西日本新聞に対する批判が繰り返されている。タイトルを挙げると、91年3月27日の「西日本新聞へ敬意は払えない」、同29日の「再び西日本新聞の偏向」、4月1日の「保守の犬」と続く。いずれも奥田八二氏が3選を果たした福岡県知事選のさなかの日記である。

●救いなき苛烈な言葉

内容は「保守や他県にこびる新聞社」「特定候補の得票減になるような報道を敢えてする」「西日本新聞はやはり二流か三流の新聞に他ならない」と厳しさを乗り越えて、憎しみや悪意すら漂う。そして「バカ新聞」「保守の犬」と口汚く断定する。「(西日本新聞の)記者に会うのさえ嫌になる」と言われてしまうと、元担当記者としてはまさに身もふたもない心境に陥る。

91年4月の知事選は保守陣営が2候補に分裂したこともあり、奥田氏陣営は過去2回の社共共闘が連合型に変化したとはいえ、楽勝ムードが漂っていた。実際に奥田氏が約97万票、重富吉之助氏約54万票、山崎広太郎氏約36万票という結果だった。それでもこの時期、既に2期8年も知事を務めた奥田氏が西日本新聞を標的にこれほど苛烈ないら立ちを心の内に抱えていたことに驚きすら抱いた。

保守・革新の枠を超えて有権者の支持を集めても、県議会は圧倒的な少数与党。与党内も社会、共産両党の主導権争いが垣間見え、必ずしも一枚岩とは言えなかった。選挙態勢は「労戦統一」の名の下に大きく変化した。奥田氏の心をささくれ立たせたものは私が想像するよりもはるかに大きかったのだろう。

「奥田日記」には西日本新聞だけではなく、中央も含めた保守政界や経済界などをこき下ろす言葉が散見される。矛先は時には革新陣営内部にも向かう。奥田氏は思うにならない県政へのうっぷんを日記にぶつけていたのかもしれない。救いのない言葉遣いについては、研究会でもしばしば議論の対象になる。公表するに当たって、このまま掲載していいのか——ということだ。

私は基本的には、差別的あるいは明白な思い違いでなければ、そのまま掲載せざるを得ないと判断する。西日本新聞批判についても同様だ。それが奥田氏の内心の発露であるなら、日記を手がかりに奥田革新県政が日本政治史に果たした役割を研究しようとする立場とし

ては受け止めざるを得ない。

ただし初めて日記を目にした人は、これほど激しい批判に驚くのではないか。奥田氏と西日本新聞の間に何があったのか、奥田氏が批判の理由を具体的に記していないだけに、理解に苦しむだろう。西日本新聞記者として奥田氏と福岡県政を取材し、日記の研究会にも席を置く以上、激しい批判の背景を考察する責務を感じざるを得ない。結論を先に述べるなら、奥田氏は西日本新聞を含めたメディアの果たす役割に理解が及ばなかったのではないか。

●見当たらない直接的引き金

奥田氏が批判の根拠にした記事が西日本新聞に掲載されているのかどうか。特定候補の得票減につながる記事などが選挙前に載るとはにわかには信じがたいが、知事選関連の記事が多くなった91年2月から3月にかけての朝夕刊を西日本新聞データベースの過去紙面検索で調べた。

日記の西日本新聞批判で手がかりとなるのは、3月27日付の「それらしくみせないで読者の声の紹介という形をとって革新叩きをやっている」という記述だ。そこで知事選告示前の2月1日付～3月末までの朝刊読者投稿欄「こだま」、夕刊の電話意見「テレホンプラザ」をみたが、該当するような「革新知事では補助金が来ない」といった指摘はなかった。

「こだま」には逆に、福岡県知事選について「中央権力の横暴に対する一種のレジスタンスではあるまいか」との指摘が載っていた。この時期、湾岸戦争を巡り平和を求める投稿が多く、「こだま」に隣接する「新聞へ私の意見」では奥田県政の三役だった池田幸雄出納長が3月14日付で「平和外交の理念と哲学を構築するため、本紙の積極的取り組みを期待する」と求めた。

選挙の際には一般記事でも有権者の声をまとめる。91年知事選で西日本新聞は3月18日の告示日付夕刊、19日付朝刊、有権者500人の意識調査結果を掲載した3月28日付朝刊で「有権者の声」を紹介した。だが、当然のことながら「旧産炭地振興は住民の関与を含めて突っ込んだ論議を」「ごみ対策と交通問題の改善を求めたい」など、誰が当選しても課題となる地域政策ばかりで、日記の批判に当たるような声は見当たらなかった。

ただし3月19日付朝刊の有権者の声の「浮揚へ厳しい注文」の見出しは奥田氏の誤解を招いたかもしれない。選挙戦で保守陣営が「奥田氏では県政浮揚はできない」と主張していたこともあり、自身だけへの批判と受け止めた可能性はある。4月1日付朝刊に掲載した日本世論調査会による世論調査で、首長の多選で望ましいのは「2期8年」とする回答が最も多かったことも、3期を目指す自身への批判と感じたのだろうか。たまたま3月26日付で西日本新聞社主宰の「九州21世紀委員会」の別刷り特集を織り込んだ。同委員会の初代会長は87年知事選で対決した田中健蔵氏。九州経済界を代表する形で九州・山口経済連合会の川合辰雄会長も委員に加わっており、奥田氏は悪印象を持ったかもしれない。

いずれにしても西日本新聞批判の直接的引き金になるような記事は見当たらなかった。

となると、それまでに積み重なった何らかの不満が選挙を機に噴出したと考えるしかない。

●「新聞記者は大嫌いだ」

私が福岡県庁を担当したのは奥田県政2年目の1984年3月～85年2月、2期目を目指した知事選を挟む87年2月～4月、奥田氏の後を受けた麻生渡知事時代の98年9月～2001年2月の計3回。87年の知事選は激戦だった。県政奪還を掲げた保守陣営は九州大学の学長だった田中健蔵氏を擁立し、元九州大教授の奥田氏とは「九大対決」と注目された。各地で相乗りが増える中、消費税につながる売上税導入の是非を問う形で全国注目の選挙になった。

過熱する選挙戦の中、奥田氏の選挙事務所で取材していた私は集まっていた労組幹部らに取り囲まれ、つるし上げを受けた。「ブル新のスパイだな」というのだ。西日本新聞は革新陣営の一部からは福岡経済界の一翼と見なされていることを改めて思い知らされた。長年、革新陣営で社会運動に携わってきた奥田氏に同様の認識があったとしても不思議ではない。

加えて、奥田氏にはメディア全体に対する不信感が根深かったように思う。私が初めて奥田氏を担当したのは83年知事選後の混乱が続いていたとき。私は新聞記者3年目。県政記者室では全社でみても最も新米の部類だった。県議会が毎日のように紛糾して徹夜になる原因はさっぱり分からなかった。いわば「初心者マーク」付きの状態、知事室を訪れる人たちと奥田氏の面談を取材した。もちろん水面下の「密談」は知る由もない。

そのころ、後になってみると心に引っかかる言葉を奥田氏から面と向かって言われた。「僕は新聞記者が大嫌いなんだ」。秘書室の職員は知事の「脱線発言」に慌てていたが、奥田氏は面会記事ばかり書いている若造記者ということで、気軽に本音を口にしたのかもしれない。もし奥田氏が手練れの政治家だったら本音は隠して、心にもない愛嬌をふりまき若造記者を手玉に取っていただろう。

奥田氏は社会思想史の教員として長年教壇に立ち、地方分権の視点から九州国立博物館の誘致運動にも熱心に参加した。旧社会党最左派の社会主義協会に属し、エネルギー革命の影で職を失った炭鉱労働者の救済を目指した「黒い羽根運動」を主導した。大学教授や社会運動家として十分すぎるほどの実績を残したが、政局的手腕をも駆使して政策を実現するのが政治家だという政治記者としての旧来の「常識」からすれば、政治家とは言えなかった。

メディアと奥田氏には不幸な出会いもあった。83年知事選で当選した直後、福岡県警が奥田氏の妻を巻き込んだ公選法違反「お布施事件」を摘発。奥田氏や家族の関与を巡る報道合戦に発展する中、奥田氏のメディア不信は決定的なレベルに達したのではないかと。

●懐疑的視線にいら立つ

そんな奥田氏の知事としての力量や識見をメディア側も疑った。新米記者には印象的な

場面があった。知事と各報道機関の記者との懇親会の席だ。他社も含めてベテランの先輩たちは、同席した副知事や各部長など県庁幹部を囲み、情報交換に躍起となり、「主役」であるはずの知事は1人ポツンと取り残されていた。奥田氏はベテラン記者が聞き出したい具体的な情報も県政刷新を方向付ける斬新な訴えも持っていなかった。

だからといって奥田氏の存在が意味のない「お飾り」と断言するつもりはない。豪腕知事として知られ、高額知事公舎建設でのごり批判を浴びた亀井光氏を83年知事選で引きずり下ろした県民世論の「象徴」だった。再選された87年知事選でも、長期自民政権にお灸を据えようとした世論の「象徴」になった。奥田氏の選挙を支えたのは革新だったが、世論は革新を選んだわけではなかった。奥田氏は政治権力のごりや高ぶりに対する反発の受け皿になった。

その奥田氏が今度は権力者の立場に就いた。権力に対しては右であろうと左であろうと、国政であろうと地方自治であろうと、厳しい監視の視線を向けるのがメディアの役割だ。権力が暴走しかねないことは歴史が証明している。残念ながら奥田氏にはメディアのそうした役割に関する認識が薄く、負けず嫌いの性格も影響して自らを批判するものはすべて敵対勢力と見なすところがあった。少数与党にうずもれ、自らが権力者であるとの意識を失っていたのかもしれない。

一方、世論が奥田氏に求めたものは単に亀井氏を退陣に追い込み、自民党に一瞬のつまづきを味わわせるだけではなかった。旧来とは異なる「新しい県政」の実現を期待したはずだ。確かに少数与党や経験不足、官僚組織の掌握などのハードルが高くそびえていた。それでも世論の支持を最大限生かす工夫はできたはずだ。奥田県政は県民世論の期待に十分に答えているのか——メディアの懐疑的視線は一段と厳しさを増したように思う。同じ光景を私たちは国政の旧民主党の失敗でも目撃した。

そうしたメディアの報道に奥田氏はいら立っていた。中でも福岡県紙の位置付けを持ち、福岡県政に関する報道量が多い西日本新聞を奥田氏は不満の標的に据えたのではないか。九州のブロック紙でもある西日本新聞が同時期に知事を務めた熊本県の細川護熙氏、大分県の平松守彦氏を「分権の旗手」と持ち上げたことについて「他県にこびる」と別の不満を抱いたのかもしれない。

奥田氏は西日本新聞をはじめとするメディアを保守陣営とスクラムを組んで自らや革新勢力を追い落とそうとする「敵」と認識し、メディア側は世論の願いを実現できない奥田氏に「期待はずれ」の烙印を押した。日記の西日本新聞批判は、奥田知事とメディアの12年にわたった相互不信、すれ違いの一断面だったといえる。